

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第318次発掘調査報告書 —



報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと—ひめじじょうあとだい318じはつくつちょうさほうこくしょ—		
書名	姫路城城下町跡—姫路城跡第318次発掘調査報告書—		
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告		
シリーズ番号	第26集		
編著者名	黒田 祐介		
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター		
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1		TEL (079) 252-3950
発行年月日	平成27年(2015年)3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 しろがねまち 白銀町9・10番地	28201	020169	34° 49′ 48″	134° 41′ 25″	2014. 4. 15 ～ 2014. 4. 17	43.39m ²	建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		遺跡調査番号		
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	溝、土坑	陶磁器・瓦		20140024		

— 例 言 —

1. 本書は、兵庫県姫路市白銀町9・10番地で行った姫路城城下町跡(遺跡番号:020169)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社北村工務店からの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
3. 確認調査(調査番号:20130117)は姫路市埋蔵文化財センター 小柴治子が、本発掘調査(調査番号:20140024)は姫路市埋蔵文化財センター 黒田祐介が担当した。
4. 整理作業は、平成26年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。
5. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
6. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
7. 本書で使用した遺構は以下のように呼称した。 溝→SD、土坑→SK
8. 本書の執筆・編集は、黒田がおこなった。
9. 報告書に関わる図面・写真・遺物は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第26集

姫路城城下町跡—姫路城跡第318次発掘調査報告書—

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発 行 日 平成27年(2015年)3月31日

印刷・製本 丸山印刷株式会社
〒676-8566 兵庫県高砂市神爪1丁目11番33号

平成26年(2014年)

姫路市教育委員会

調査に至る経緯 姫路市白銀町9・10番地において建設工事が計画された。当該地は姫路城城下町跡(県遺跡番号:020169)に該当している。そのため平成25年6月25日から26日にかけて確認調査(遺跡調査番号:20130117/姫路城跡第301次)を実施し、江戸時代の遺構を確認した。このことから株式会社北村工務店と発掘調査委託契約を締結し、新設基礎部分を対象に本発掘調査(遺跡調査番号:20140024/姫路城跡第318次)を実施した。調査対象面積は43.39㎡、現地での調査期間は平成26年(2014年)4月15日から17日の3日である。

姫路城城下町跡における調査地の位置 姫路城は大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀で武家屋敷・町家を囲い込む総構の縄張を採用している。調査地の白銀町9・10番地は外曲輪の町家に該当している。大天守から南南西約1kmに位置し、飾磨門から中ノ門に至る街路に面していたことが絵図から読み取れる。また絵図には「しろかね町」、「下白カネ町」と町名が記載されており、これが現在に引き継がれている。

調査の成果 本発掘調査に加え、確認調査の成果もあわせて報告する。確認調査と本発掘調査で設定した調査区は9箇所である。そのうち確認調査の調査区は3区と8区の一部である。遺構を確認したのは2・3・4・6・8区で、それ以外は攪乱が激しく、遺構は確認できなかった。なお遺構別の詳細は表1にまとめて掲載している。

江戸時代の土層上面は標高11.7m(地表下20cm)で検出した。江戸時代の土層は約50cmの厚みがあり、その下では自然堆積層がみられた。基盤層を確認したのは8区のみで、標高10.6mであった。4区では標高約10.4mまで調査したが、基盤層を確認していない。このことから地形が東に向かって落ち込んでいると考えられる。なお自然堆積層からは須恵器・土師器小片、格子タタキの平瓦片が出土した。

調査地は西側に表口をもつ町家跡であることから、概ね西半が建物に、また東半が裏庭に該当すると考えられる。4区で比較的大型の土坑SK1・SK2等を確認していることから、建物の東端は4区より西にあることがわかる。ただし礎石等の建物に直接関係する遺構は確認できておらず、建物の厳密な位置や規模は不明である。また調査地保区半部で東西に延びる石組溝を2条確認した。SD1南辺石組とSD2北辺石組間の距離は約3.5mを測る。これらは町家の敷地境の可能性が高い。その根拠として、石組溝を越えて広がる遺構がみられない点、調査地近辺に多く残されている町家地割の間口が4mを下回るものみられる点が挙げられる。そのほかにSD1・SD2に平行する溝SD3・SD4・SD5を確認した。遺物は出土していないが、埋土の色調から江戸時代以前の遺構の可能性もある。

総括 町家の敷地境とみられる石組溝を確認できたことは大きな成果といえる。白銀町61番地他で実施した町家跡の発掘調査(姫路城跡第289次)では、町家の敷地境遺構が「杭列→素掘り溝→石組溝」の変遷をみせることを確認している。今回の調査では、調査区が狭小であり、攪乱を受けていたこともあってか杭列は確認できていないが、SD1に関しては「素掘り溝→石組溝」の変遷を確認することができた。一方、SD2に関しては石組溝以前に何らかの区画遺構が存在した明確な痕跡は認められなかった。

- 【参考文献】
 大橋康二1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55)ニュー・サイエンス社
 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)
 黒田祐介2014『姫路城城下町跡—姫路城跡第289次発掘調査報告書—』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第13集)姫路市教育委員会
 中川 猛2012『培烙考—姫路と周辺の培烙について—』『山口大学考古学論集』(中村友博先生退任記念論文集)中村友博先生退任記念事業会
 乗岡 実2002『近世備前焼播鉢の編年案』同編『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会

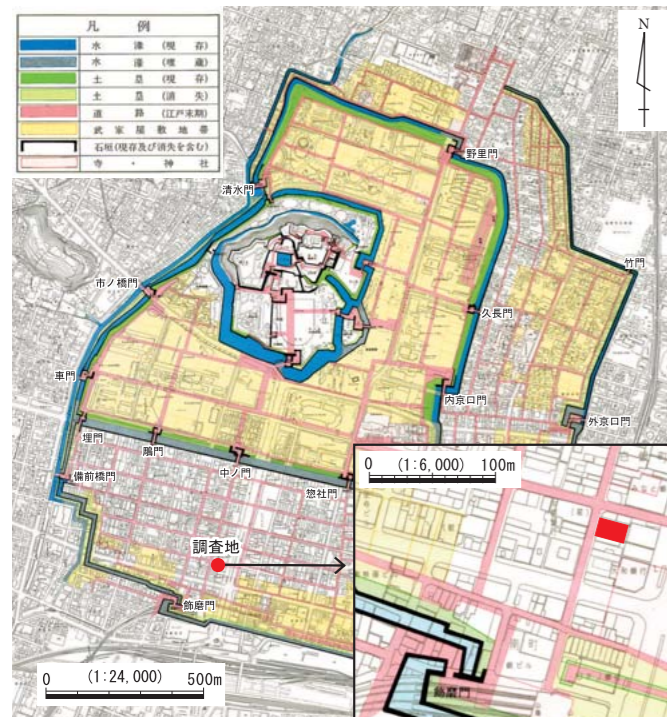


図1 調査位置図

遺構	規模・構造・出土遺物等
SK1	SD1に切られる。直径1.2m以上、深さ0.9m。埋土に貝殻を多く含む。出土遺物に肥前系染付磁器皿(大橋II期か)、肥前系陶器碗、肥前系陶器皿(砂目)、京・信楽系施釉陶器碗、陶器甕、焙烙(中川E1類)等がある。
SK2	直径1.4m以上、深さ1m。瓦の廃棄土坑。出土遺物に東山焼(姫路産染付磁器)小杯、染付磁器碗蓋(肥前系か、大橋V期)、白磁皿、施釉陶器蓋、施釉陶器片口、瀬戸美濃焼タンコロがある。瓦は鳥倉(三つ巴文、周囲に珠文16個)、軒平瓦(青海波文)がある。
SK3	SD2に切られる。直径1m、深さ1m。埋土に貝殻を含む。出土遺物に肥前系陶器皿(胎土目、砂目)、備前焼播鉢(乗岡近世1期、ナナメ方向の播り目)、土師器皿(灯明皿、底部糸切り)がある。磁器はない。
SK4	直径0.5m以上、深さ約0.5m。出土遺物なし。
SK5	SD1に切られる。平面規模不明。深さ0.5m。出土遺物なし。
SK6	直径0.7m、深さ0.5m。埋甕掘方か。出土遺物なし。
SK7	SD1に切られる。直径0.8m、深さ0.6m。埋甕掘方か。出土遺物は小片のみ。
SD1	SK1・SK5・SK7を切る。幅0.4m、深さ0.4m。石組溝。石組は2段、裏込めあり。基本的に自然石を利用しているが、8区の北辺の土段に間知石様の加工石材を利用。石組の下にも溝の埋土と見られるシルトが堆積していることから素掘りの溝を改修し、石組溝にしている可能性が高い。町家敷地境の溝か。出土遺物に肥前系染付磁器碗(大橋IV期)、肥前系染付磁器皿(大橋IV期)、土師器皿(底部糸切り)がある。石組解体時に染付磁器碗(焼継)が出土しているため、19世紀に石組が構築された可能性がある。近代以降にはコンクリート製会所が付け加えられる。
SD2	SK3を切る。幅0.4m、深さ0.45m。石組溝。石組は2段で、裏込めあり。自然石を利用。町家敷地境の溝か。出土遺物なし。近代以降には土管を半截したものをつなぎに据えており、継続利用される。
SD3	幅0.7m、深さ0.4m。出土遺物なし。
SD4	幅0.8m、深さ0.3m。出土遺物なし。SD3の続きか。
SD5	幅0.6m以上、深さ0.3m。出土遺物なし。

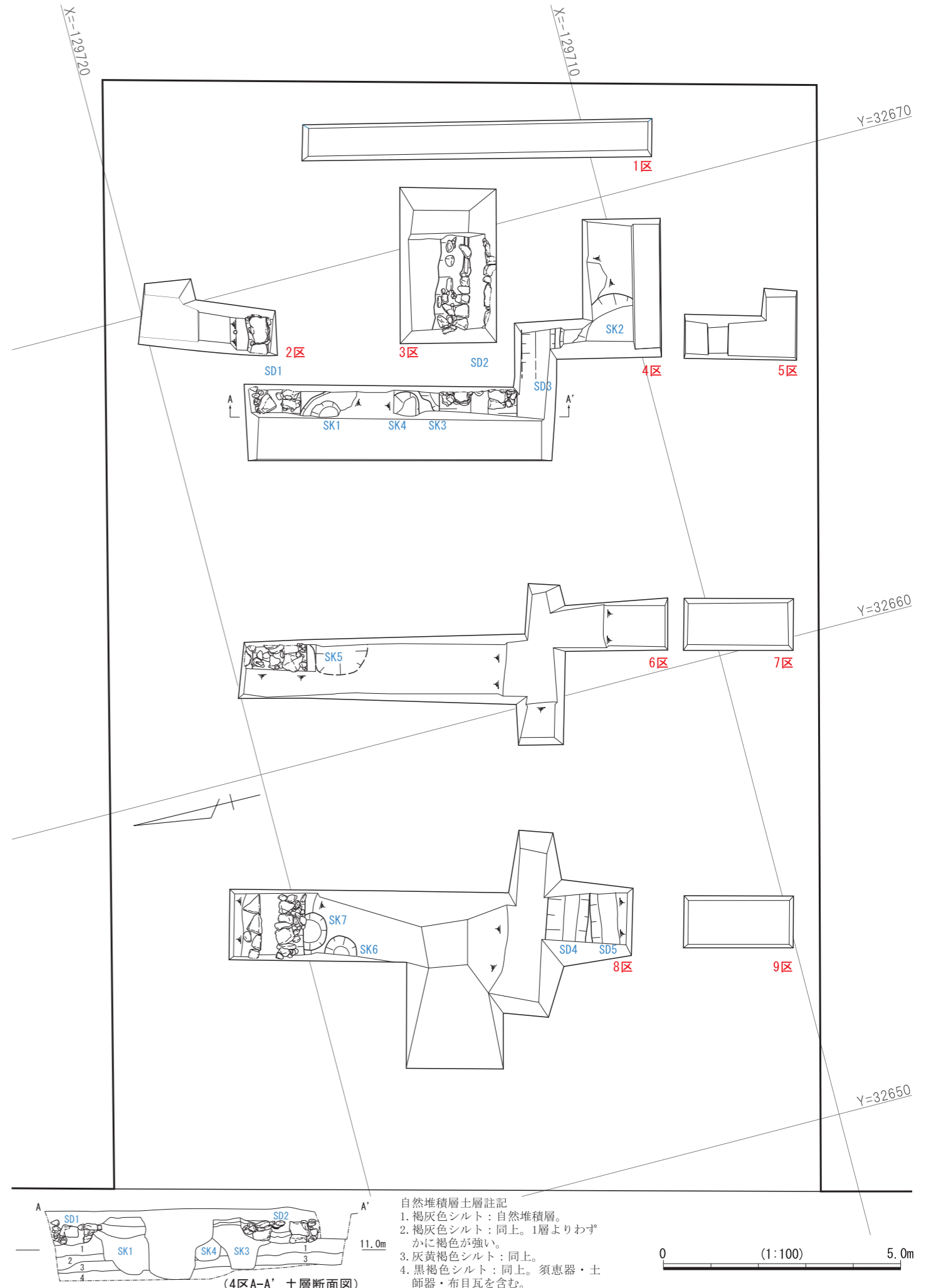


図3 調査区平・断面図

- 自然堆積層土層註記
 1. 褐灰色シルト：自然堆積層。
 2. 褐灰色シルト：同上。1層よりわずかに褐色が強い。
 3. 灰黄褐色シルト：同上。
 4. 黒褐色シルト：同上。須恵器・土師器・布目瓦を含む。